

昔むかし、アルデンヌの王きさまに、たいそう美しいお姫ひめさまがありました。あるとき、お姫おもさまは重い病びょうき気にかかりました。どんなお医者いしやもお姫おなさまを治なすことができず、王きさまはたいへん悲かなしみました。そして、深い森ふかに住すむ占い師うらなのおばあさんしにみてもらうことにしました。おばあさんは、お姫おなさまをよくみたあと、頭かぶをふつていいました。

「お姫おなさまの病びょうき気を治なすには、この国くにでいちばんみごとな五月ごのももを三つめし上げなければなりません。そして、治なつてから七日いっない以内に結婚けっこんしなければなりません」

王きさまは、すぐにおふれを出だしました。

「この国くにでいちばんみごとな五月ごのももを三つ持もつてきた者ものを、姫ひめと結婚けっこんさせる」

国くにじゅうの若者わかものが、運うんをためそうと、ももを入いれたかごを持もつて城しろにやつて来きました。けれども、お姫おなさまを治なせるほどのみごとももを持もつてきた者ものは、ひとりもいませんでした。やがて、城しろにやつて来る若者わかものはだれもいなくなりました。

近くの村むらに、母親むすこと二人の息子むすこが住すんでいました。上のふたりはりっぱな若者わかものでしたが、末すえの息子は小さくて少々しょうしょう頭あたまが弱いと思おもわれていました。

ある日ひ、上の息子が、お姫おなさまの病びょうき気を治なすために城しろに出でかけることにしました。母親ははは、庭にわで取とれたみごとな五月ごのももを三つ、ていねいにふきんに包つつんで、かごに入れて持もたせてやりました。

息子が歩いていくと、ひとりのおばあさんに会あいました。おばあさんは、

「かごの中に何なにを入いれているのかね」とたずねました。息子は、

「うさぎのふんだよ」と答こたえました。するとおばあさんは、

「じゃあ、おまえは、うさぎのふんを持もつていくがいい」といいました。

息子は城しろに着つくと、かごを差さし出だしました。王きさまがかごを開あけてみると、ふきんの中には、なんと、うさぎのふんが入いっていました。王きさまは腹はらを立てて息子を追おいかえしてしまいました。息子は、はずかしそうに家いへに帰かえり、何なにがあつたか話わそうとしませんでした。

しばらくして、二番目の息子が出でかけることにしました。母親ははは前まへより念ねんを入れて、庭にわの五月ごのものなかでもいちばんみごとな三つを選えらんで、いちばん上じょう等のふきんに包つつんでかごに入れてやりました。

息子が歩いていくと、おばあさんに会いました。おばあさんは、

「かごの中に何を入れているのかね」とたずねました。

「馬のふんだよ」

「じゃあ、おまえは、馬のふんを持っていくがいい」

息子は城に着くと、かごを差し出しました。王さまがかごを開けてみると、ふきんの中には、なんと、大きな馬のふんが三つ入っていました。大さまは腹を立てて息子を追いかけました。息子はうなだれて家に帰り、何があつたか話そうとしませんでした。

やがて、末の息子も、出かけた方がいいだしました。母親は、

「兄さんたちがふたりとも失敗したのに、おまえなんかうまくいくはずがない」といつて引き止めました。けれども、末の息子はどうしても行くといいはりました。そして、自分で、たいして選びもせずに、庭の五月のももを三つもぎ、ありあわせのふきんに包んでかごに入れました。

息子が歩いていくと、おばあさんに会いました。

「かごの中に何を入れているのかね」

「ぼくのうちの庭のいちばんみごとな五月のももを三つだよ、おばあさん。お姫さまと結婚するんだ」

「じゃあ、おまえは、いちばんみごとな五月のももを三つ持っていくがいい。お姫さまは、おまえと結婚なさるよ」

おばあさんはそういうと、息子に銀の笛を一本くれていました。

「この笛を持っていきなさい。王さまが何かむずかしいことをいいだしたら、きっと役に立つだろう」

末の息子は、城に着くと、かごを差し出しました。王さまは、うたがわしそうにふきんをつまみ上げました。すると、この国でいちばんみごとな五月のももが三つ入っていました。王さまは喜んでさげびながら、お姫さまの所へももを持っていきました。

お姫さまは、ももをひとつ食べると、ベッドからとび下り、ふたつ食べると歌いだし、三つ食べるとおどりだしました。城じゅうの人たちが大喜びしました。

ところが、王さまは、ももを持ってきた百姓の若者を見て、こんなみすばらしい若者とお姫さまを結婚させたくないと思いました。そこで、王さまは、若者を追いはらうために、

こんな問題を出しました。

「おまえに百匹のうさぎをあずけるから、四日のあいだ世話をするのだ。毎朝うさぎたちを森に連れて行って草を食べさせ、夜には一匹残らず城に連れかえってくることに。それができたら、姫と結婚させよう」

つぎの日、若者は、うさぎを百匹任せられました。ところが、森へ連れていこうと城の門を出たとたん、うさぎたちはあちこちに散らばってはねていってしまいました。若者は走りまわってうさぎをつかまえようとしたが、夕方、帰る時間になっても一匹もつかまえられませんでした。若者は泣きだしました。

そのとき、とつぜん、若者は銀の笛のことを思い出しました。そこで笛を取りだし、ひと吹き吹いてみると、ぜんぶのうさぎが頭をもたげ、ふた吹きするとぜんぶのうさぎがかげよってきて、三吹き目で、ぜんぶのうさぎが若者の前にならびました。若者は百匹のうさぎの先頭に立って城にもどりました。そして、王さまに、

「どうぞ、ご自分で数えてみてください」といいました。王さまが数えると、うさぎは、ぴったり百匹いました。

つぎの日、若者がうさぎを連れて森へ出かけてしまうと、王さまは、お姫さまをよんでいいました。

「おまえ、召使いのかっこうをして、あいつから、うさぎを一匹買っておいで」
そうすれば、百匹ぜんぶを連れて帰ることができないと、王さまは考えたのです。

お姫さまは召使いになりすまして森へ行き、若者に、

「うさぎを一匹売っておくれ」ともちかけました。若者は、

「これは売り物じゃないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」と答えました。お姫さまが、

「どうすればいいの」とたずねると、若者は、

「ぼくにキスしてくれればいい。そうすれば一匹あげるよ」と答えました。お姫さまは、若者にキスをして、うさぎを一匹もらうとエプロンに入れて、喜んで城に向かいました。

若者は、うさぎを集める時間になったので、銀の笛を吹きました。

お姫さまは、ちょうどそのとき、城の門をくぐろうとしていました。最初の笛のひと吹きが聞こえると、うさぎはお姫さまのエプロンから頭を出しました。ふた吹き目が聞こえ

ると、うさぎはお姫さまの手をふりはらって、地面にとびおりました。三吹き目が聞こえると、ほかのうさぎたちといっしょに、若者の前にならびました。若者は、百匹のうさぎの先頭に立って城にもどりました。

王さまはこまりはて、こんどは、お妃をよんでいいました。

「おまえ、料理女のかっこうをして、あいつからうさぎを一匹買っておいで」

つぎの日、お妃は、料理女になりすまし、金貨のいっぱい入ったさいふを持って、森へ行きました。そして若者に、

「このお金で、うさぎを一匹売っておくれ」といいました。

「これは売り物じゃないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」

「どうすればいいの」

「草の上で三回とんぼ返りをするだけでいい。そうすれば一匹あげるよ」

お妃はこまりましたが、ほかにだれも見えていないので、思いきって三回とんぼ返りをし、うさぎをもらって帰りました。王さまは、お妃からうさぎを受けとると、小部屋にとじこめてかぎをかけました。そして、

「こんどこそ、あいつは百匹のうさぎを連れて帰れないぞ」と思って喜びました。

やがて、うさぎを集める時間になったので、若者は銀の笛を吹きました。

ひと吹き目が聞こえると、うさぎは小部屋の天窓にとびあがり、ふた吹き目が聞こえると、城の堀をとびこえ、三吹き目が聞こえると、ほかのうさぎたちといっしょに、若者の前にならびました。若者は、百匹のうさぎの先頭に立って城にもどりました。

王さまは、かんかん腹を立てました。

つぎの日、王さまは、商人に化け、ろばに乗って森へ行きました。そして若者に、銀貨ひとふくろでうさぎを一匹買おうといいました。

「これは売り物じゃないんだ。あんたが自分でかせぐものなんだ」

「どうすればいいのだ」

「あんたがそのろばのおしりに、三回キスするだけでいい。そうすれば一匹あげるよ」
若者はそういって、ろばのしっぽを持ちあげ、キスする場所を指差しました。王さまは、たいへんこまりましたが、ほかにだれも見えていないので、思いきって、ろばのおしりに三回キスをしました。そして、うさぎを受けとると、ろばを走らせ急いで城にもどりました。

うさぎは台所に運ばれ、毛皮をはがれて、なべに入れられました。王さまは、だんろの前で、うさぎを煮ながら大喜びでした。

さて、うさぎを集める時間になったので、若者は銀の笛を吹きました。

ひと吹き目が聞こえると、うさぎはなべからとびだしました。ふた吹き目が聞こえると、テーブルの上のせてあった毛皮を着て、三吹き目が聞こえると、王さまの足のあいだをくぐりぬけ、階段をかけ下りて野原をとびこえ、ほかのうさぎたちといっしょに若者の前にならびました。若者は、百匹のうさぎの先頭に立って城にもどりました。

ところが、王さまはまだあきらめようとせず、こんどはこんな問題を出しました。

「おまえは、みんなの前で、三つのふくろを真実でいっばいにしなければならぬ。それができたら、姫と結婚させよう」

それから、王さまは大宴会をもよおし、大勢のお客を招待しました。

食事が終わるころ、王さまは若者をよんで、三つのふくろを真実でいっばいにするようにと命じました。そこで、若者はまず、お姫さまに向かってたずねました。

「二日前、あなたは召使のかっこうをして、森でうさぎの番をしているぼくの所に、うさぎを買いにやってきました。わたしは、あなたのキスと引きかえに、うさぎを一匹あげました。それはほんとうですか」

お姫さまは、

「ええ、ほんとうよ」と答えました。若者は、

「第一の真実、そら、ふくろに入れ」といって、ひとつ目のふくろの口をしめました。

つぎに、若者は、お妃に向かってたずねました。

「二日前、あなたは料理女のかっこうをして、森でうさぎの番をしているぼくの所に、うさぎを買いにやってきました。わたしは、草の上で三回とんぼ返りをするのと引きかえに、うさぎを一匹あげました。それはほんとうですか」

「ええ、ほんとうです」

「第二の真実、そら、ふくろに入れ」

若者は、ふたつめのふくろの口をしめました。

つぎに、王さまに向かつていいました。

「きのう、あなたは商人に化けてるばに乗り、森でうさぎの番をしているぼくの所に、う

さぎを買いにやって来ました。わたしは、ろばのおしりに三回キスをするのと引きかえに「もうよい、もうよい」と、王さまはあわてて若者をさえぎりました。そして、「三つ目のふくろはもう入れなくてもよい。姫と結婚するがよい」とさげびました。

お姫さまは、若者に知恵があることが分かって大喜びでした。若者は、お姫さまと結婚して幸せに暮らしました。

* わたしも結婚式によばれて、うんとおしゃれをして行きました。くもの巢のドレスにバターの帽子、ガラスのくつ。ところが、野原を通ったらお日さまが帽子をとかし、氷の上を歩いたら、くつがカチカチ鳴りました。ほうら、話がふくろから出てしまったよ。

* アルデンヌ フランス、ベルギー、ルクセンブルクにまたがる地方。

* わたしも結婚式によばれて、話がふくろから出てしまったよ。これで昔話はおしま
いという意味の決まり文句。